

Title	報告MAP CLUB 「ナースがケアで立ち止るとき」
Author(s)	桑原, 英之
Citation	臨床哲学のメチエ. 8 P.28-P.29
Issue Date	2001
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/5237
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

たいことだ。だが一方で、教えられる側の生徒にとって、哲学や倫理が求めることと、一つの決まった答えを導き出す作業という落差の問題をどう理解すべきなのだろうか。

おそらく英語や国語や数学や理科といった、倫理以外の教科や科目も、生徒が自分自身で考える力をつけることを目指しているだろう。だが、そういった教科や科目は、カリキュラムや授業というシステムの中にうまく適合して、教える側も教えられる側も安定した空間、つまり、「教える - 教えられる」という関係が完全になりたつ空間をなしている。この関係がよいものか悪いものかは別にして、生徒がこのことを納得するならば、窮屈なものではあるが、同時に、決まり切ったコミュニケーションが行われる場の中で居心地のよさも感じられる。しかし、倫理や哲学は、この関係を揺さぶるものがある。教える

べき内容や答えを、教師は必ずしも持っているわけではない。この場合、「教える - 教えられる」という関係の中で、窮屈さを感じながらも、その関係を納得している生徒にとっては、教える側の者がそこで教えるべき内容や答えを持っていないという授業は、逆に居心地の悪さを感じてしまうだろう。安定した関係とは、自分の発言や導き出した解答が、教師によって評価の対象とされることを生徒が納得している状況であるが、「教える - 教えられる」という関係の中で、評価の対象となるはずの、その解答が隠されたままのコミュニケーションというのは、生徒と教師の関係と授業をどのような方向に導くものなのであろうか。理想的な哲学の教育と、その教育が行われる学校や授業という場に特有の——評価が常につきまとう——状況には、大きなギャップが存在している。(もりよしちか)

2001.3.24

報告

MAP CLUB 「ナースがケアで立ち止まるとき」

桑原英之

去る3/24、メディカ出版のマップクラブ(注)に臨床哲学研究会が協力して、ナースを対象とするイベントを行った。当研究室の西川(博士課程前期、看護師)がプランナーとなり「ナースがケアで立ち止まるとき」というテーマで企画した。ナースが自分のケアを省みることができない理由は「業務に追われて忙しい」という看護現場の状況から語られることが多い。だが業務に忙殺されているのは事実間違いないにしても、そこからもう一步踏み込んでケアについて考え、

別の観点から問いをたてる作業をナースたちに提案してみよう、というのが今回の企画の意図である。イベント内容を概観しておく。まず先のテーマに関する体験を2人のナースに「体験トーク」という形で話してもらい、それを受けてグループワークを行った。次に各グループで行われた議論の内容をレジュメにして発表・配布し、その発表も参考にしながら5人のスピーカーに「キートーク」という形で発言してもらう。最後に中岡が今回のイベントのまとめも兼

ねてコメントする、というのが全体の流れである。イベント内容を全てフォローするには紙幅が足りないので、特に当研究室が最も関与した「グループワーク」の作業に話を限定し、その内容を報告する。

グループワークの形式を述べておくと、1グループにつき進行役と書記を含めて7, 8人構成で、全7グループ、時間は100分。目的は冒頭にも述べたように他の人との議論の中で特定のテーマについて共に考えることである。そして最後に「どのようなテーマについて、どのように議論し、どんな意見が出たか、或いはどのような結論に達したか」を発表する段までもっていくことである。進行役はこの目的に向けて議論を取り仕切る役割だが、今回参加者(ナース)の語りやすさも考慮に入れ、ベテランナースの方に事前にその任をお願いしてあった。書記は議論の内容を筆記し発表内容をまとめる際、それがスムーズに行われるよう補助する役割であり、当研究室の院生がこれにあたった。筆者もその1人として参加したので私の感想を交えつつその様子を少し具体的に述べてみたい。

私のグループでなされた議論内容の1つを挙げてみると「看護観とは何か？」であった。これは体験トーク時に出てきた「看護観」という言葉を受けてなされた議論であり、グループのメンバーからは、看護観という言葉の曖昧さが看護と看護業務の境界の曖昧さにつながっているのではないかと、といった意見が出た。又、本来看護経験を積んでいく中で滋養されるはずの個々の看護観が、何かそれ以前にあるべき「理念」へと変質せられているのではないかと、そしてその誤った理念が現場で不必要に統制的に機能しているのではないかと、といった意見もあった。

最後に筆者の個人的感想を述べておく。これらの意見が出たことに今回グループワークを

行った意味はあるし、それゆえグループワークの目的を或る程度達成できたのではないかと考えている。しかし100分という限られた時間で初対面の人同士が自分の考え・経験を話し合い、議論をステップアップさせる事の難しさも痛感せざるをえない。現にどのグループにおいても、議論を1つの方向性にまとめて結論を出すに至らなかった事は反省すべきである。ただしその一方で、参加者に書いてもらったアンケートの中に、「話しを聞いてもらえてよかった」という率直な感想があった。ひょっとしたら、この、議論の一步手前の段階が、まだまだ必要なものかもしれない。(くわばらひでゆき)

(注)マップクラブとは現場の生の声を反映させた医療・看護雑誌づくりを目指し、メディカ出版が昨年始めたイベントである。

第3回MAP CLUB主催イベント

(協力)大阪大学大学院臨床哲学教室・臨床哲学研究会

『ナースが「ケア」で立ちどまる時

～業務に追われて看護ができないと困っているあなたへ～』 2001年3月24日(土) 13:00 18:00

会場：メディカ出版『めでいかの学校』

—プログラム—

- I. 体験トーク「ナースが立ちどまる時」
 - ・ナースが実際に感じている疑問や思いを語る
 - スピーカー：伊藤悠子(芦原病院看護婦) / 北村 勝(府中訪問看護ステーション看護師)
- II. グループワーク
 - ・体験トークに関する少人数のグループワーク
 - 各グループに臨床哲学研究会のメンバーが参加
- III. グループワーク発表
- IV. キートーク
 - ・シンポジウム形式で、前半の議論についてコメント
 - 司会：西川 勝(介護老人保健施設ニューライフガラシア看護主任、大阪大学臨床哲学博士前期1年)
 - スピーカー：中岡成文(大阪大学大学院臨床哲学教授) / 田村恵子(淀川キリスト教病院看護部 婦長 がん専門看護師) / 中川愛子(PL病院看護部 婦長) / 武田保江(看護婦 大阪大学臨床哲学博士後期3年) / 藤井彰人(メディカ出版編集部)
- V. フロアディスカッション
- VI. まとめ 中岡成文(大阪大学大学院臨床哲学教授)